

国内経済情勢

概観

国際収支の改善は進み、7月は経常勘定でも黒字となった。7月の鉱工業生産は、前月比1.5%の減少を示したが、実勢はそれほど大幅な低下ではなく、高水準横ばいのうちに幾分弱含みとなってきた程度とみられる。消費の伸びがまだ強い反面、原材料在庫の圧縮が続き、設備投資も、なお高水準ながら若干落ちてきたようである。

このように、景気調整は金融引締め基調の下で進展をみせているが、なお問題なしとしない。金融面では、滞貨資金とともに、繰延べられてきた決済のための資金需要が表面化しはじめてきた。こうした資金に対する貸出が先行き金融市場の緩和期待感と結びついて、企業の緊張感に一息つかせている。このことは商品市況に底入れ感が広がり、物価が微騰に転じていることとともに秋場需要期を控えて注目されることである。

為替収支、経常勘定でも黒字

7月の国際収支は、経常収支でも久方振りに22百万ドルの黒字となった。貿易収支が輸出の増勢と輸入の落着きにより、前月来の受超幅をさらに拡大したためである。なお、資本収支は、農産物借款の受入れ終了、インパクト・ローン一服、ユーロ・ダラーの減少などもあって2百万ドルの赤字となった。このため、総合収支の黒字は12百万ドルと比較的小幅にとどまった。

輸出は好調を続けている。為替、通関でみて

も、また信用状などでみても、前年比2割ないしそれ以上の増加となっている。鉄鋼化学製品などが引き続き伸びているほか、機械、繊維の一部なども好調である。依然米国向けが増加の中心であるが、欧州向けも、英国向け水産かん詰やソ連、西欧向け鋼材などの増加を主因に、かなりの好転をみせている。

一方輸入は、為替ではなお漸減傾向を続け、7月は前年を16%下回った。通関(前年比-6.1%)でみると、食料、機械ならびに木材、石油は総じて高水準を続けている。一方、繊維、鉄鋼を中心とする素原材料はわずかながら減勢を示しているが、減少幅は次第に縮まってきた。なお、これまで生産の高水準にもかかわらず輸入が急減をみえてきたのは、主として輸入原材料在庫の食いつぶしと、輸入依存度の高い生産財部門の減産によるものである。しかし、業界の実情や在庫率などからみると、輸入原材料在庫の大きな食いつぶしは考えられないので、今後この面からする輸入の減少はそれほど期待されまい。

生産、高水準横ばいのうちに幾分弱含み

7月の鉱工業生産(季節調整済み)は、6月+1.1%のあと、-1.5%の減少となった。しかし、水準としては4~6月平均よりもわずかながらなお高い。生産の大勢は、高水準横ばいが続いており、そのなかで幾分弱含み傾向がみえてきたところといえよう。

業種別にみると、滞貨の多い鉄鋼、石油など生産財部門の生産は減少した。一般機械も、設備投資の減勢を映じて減少となった。自動車(夏期休

暇)、家庭用電気器具(夏物生産の一巡)も減少をみたが、これには季節的な面が強い。反面、消費関連財(合織、皮革など)は依然として増勢を続けている。非鉄は、輸入抑制や実需筋の在庫調整一巡から微増した。

6月の出荷は、5月に比べ-1.1%の減少となったが、4~6月をならした水準は1~3月と変わっていない。メーカー製品在庫も、6月には+0.6%と微増し在庫率もやや上ったが、大勢としてはほぼ横ばいである。

6月の機械受注、機械販売額はともに期末の関係もあって増加したが、4~6月を通してみれば、1~3月水準に比べ減勢を示している。一般機械や建設資材の出荷の減勢などと合わせ考えると、工事ベースでみた設備投資は若干低下してきたものと思われる。

商品市況底入れ感広がる

最近の商品市況は、品目により区々の動きであるが、全般に下げ渋り商状が強まり、底入れ感が広がっている。鉄鋼は、ここ2ヵ月ほど続いた安値訂正の動きが、ごく最近では一服したが、再び大きく反落する地合いにはない。その他では、非鉄が実需筋の在庫調整一巡から小反発したほか、紙(勧告操短)、木材(夏場需要の台頭)などにも、下げ渋りないし小戻しがみられ、セメントも保合っている。この間、一時操短強化や輸出の好調により小戻しをみせていた繊維は、内需の不振に再び気迷い気味となり、綿糸布、スフ糸を中心に小反落した。

こうした商況は、滞貨金融にささえられて換金投げが姿を消したことや、操短強化をはやした期待人気などによる面が強い。需給の実勢は、一部に輸出の好調などによって改善をみている面もあるが、総じてみれば実需筋の見送り人気が依然強い。市況がこのまま続伸したり、あるいは減産に

対する構えを大きくくずすような力はないものと思われる。もっとも、このような商況をながめて、企業にはやや安堵感が生まれていることも否めず、目先き秋場需要期を控えているだけに、今後の推移が注目される。

このような商品市況を反映して、本行卸売物価(食料を除く)は、7月+0.5%と5ヵ月ぶりに反騰し、8月上旬も+0.3%と続騰した。7月の消費者物価(東京)は、食料、被服、サービス料金などの値上がりにより+0.9%と再び上昇し、7月の小売物価も+0.2%と続騰をみた。

企業の金繰りに変化のきざし

金融市場は、財政資金の揚超がさらに小幅となり、7月も平穏な推移をみせた。銀行券の平均発行高も、前年比+14.5%(4~6月+17.0%)と漸減傾向を続けている。こうした推移は、金利面でも、コール・レートの落ち着きや、電々債利回りのかなりの低落といった点に現われてきた。

7月の全国銀行貸出は、前年(1,302億円増)を下回ったものの、なお1,238億円と大幅の増加を続けた。大メーカーに対する運転資金が中心であるが、滞貨資金など後向きのものがふえている。商社貸出にも、鉄鋼買取り資金などがみられた。こうした資金需要に対する貸出の実行が、全体としての貸出増加額を押し上げつつあることは否めない。

手形交換高は、最近まで伸びが鈍っていたが、7月はかなりの増加となった。市況低落、金繰りひっ迫の強かったここ数ヵ月間繰延べを余儀なくされていたものが、ここへきてかなり決済されたものとみられる。企業の金繰りはむろんまだ苦しいが、ひとところに比べれば一息つける状態に移りはじめているようである。

不渡手形や倒産状況にも、依然格別の変化はうかがわれない。